

墨東綺譚

—— 映画文学人生論

原作：永井荷風 (1937) 「朝日新聞」
参考；『断腸亭日乗』 (1980-81) 「岩波書店」
監督：新藤兼人 (1989年) 脚本：新藤兼人
出演：永井荷風 津川雅彦 音楽：林光
お雪 墨田ユキ 撮影：三宅義行
お久 宮崎美子 荷風の母 杉村春子

荷風先生も自殺したら如何ですか

荷風先生には申し訳ないが、『墨東綺譚』の墨はさんずいがつくのには、パソコンで漢字変換がうまくできない。もともとは林述斎が隅田川を言いあらわすためにつくった漢字で、幕府の瓦解後、成島柳北が詩文によく用いたが、その後、使われなくなつたという。

この小説は小学六年生のとき読みかけて、齒が立たなかつた。こんな廢語まじりの題名の小説の面白さが田舎の小学生にわかるわけがない。が、しかし、妙に心をひかれるところがあり、成人してから折にふれて何度か読んでいます。

冒頭の一行は、「わたくしは殆ど活動写真を見に行ったことがない」だ。活動写真とは映画のこと。荷風は映画が嫌いで、『墨東綺譚』の映画化も松竹からの依頼をこたわつた。「余は書生役者活動役者のために余が小説の毀損せらるゝ事をかなしむ也」と日記に書いている。

ところが、八十三歳で孤独死した昭和三十四年の秋に豊田四郎監督によって映画化され、さらに平成二年、新藤兼人監督によって再び映画化された。荷風は草葉の蔭で、原作が毀損せられたことをかなしんだにちがいない。

映画では、荷風（津川雅彦）が銀座のカフェで壮士から、「荷風先生も（芥川龍之介のように）自殺したらいかがですか」といいがかりをつけられる場面がある。また、文化勲章を荷風が受賞し



墨東綺譚

映画文学人生論

たという新聞報道をみたお雪（墨田ユキ）が「これ、あの人に似ていない？」とまさ（乙羽信子）に聞くが、「あの男エロ写真だろ」とまさに言われて、「そうね、文化勲章もらうはずないね」と納得してしまう。

こんなシーンは原作にはない。脚本家が荷風の日記『断腸亭日乗』の記述から適当につくったものである。『墨東綺譚』の読者からみれば映画はまったくのパロディで、ふざけすぎという感じだが、私は映画のおかげで、日記を読む気になったので、映画に感謝したい。

たとえば、「東京住民の被害は米国の飛行機よりもむしろ日本の軍人内閣の悪政に基づこと大なりといふべし。余が偏奇館もいつ取払の命令を受くるや知るべからず」（昭和二十年一月廿四日）という記述がある。もちろん、こんなことは発表できない。日記に書いているだけだ。

ところが、三月十九日夜の空襲で偏奇館は焼失してしまった。それから荷風の流浪がはじまり、八月十五日の終戦は岡山県で迎える。勝山で谷崎潤一郎に送られた後の記述は次の通り。

「午前十一時二十分発の車に乗る」「新見駅にて乗替えをなし、出発の際谷崎君夫人の贈られし弁当を食す。白米のむすびに昆布佃煮及牛肉を添へたり。欣喜措く能はず」。

偏奇館跡にも咲くや断腸花